報告

2013 年春の天文教育フォーラム
～天文学は社会をリードできるか？～

松本直記（慶應義塾高校）

1．はじめに

天文学は役に立つのか？　今回の天文教育フォーラムでは、過去における天文学と社会の関係に学びつつ、現在の状況を俯瞰し、未来に向けての展望を考えるため、テーマを「天文学は社会をリードできるか？　～過去に学び、現在を把握し、未来を展望する～」と題して中村士氏（帝京平成大学）、嶺重慎氏（京都大学）、岡村定矩氏（法政大学）に登壇いただき、その後会場との総合ディスカッションが行われた。開催日は 2013 年 3 月 20 日の 16：30 から 18：00 まで、日本天文学会春季年会会場の埼玉大学にて行われ、会場がほぼ満席となる約 220 名の参加があった（図 1）。

図 1　会場の様子

2．歴史のなかの天文学の役割

中村士氏からは、「歴史のなかの天文学の役割」というタイトルで、歴史的な天文学の役割や一般に対するアプローチなどを、具体例を交えながら紹介いただいた（図 2）。古代においては、天は畏れと信仰の対象であり、生活と思想の大部分を占めたが、現代においてはその役割は低下している。しかし、測量や暦法の発達など実用においてもその役割は大きい旨を述べられた。天文学が陰に陽に社会の中で果たしている意味を理解できるようにしていくことの必要性を指摘された。

図 2　中村 士 氏

3．現代社会における天文学の役割

続いて嶺重慎氏から、「現代社会における天文学の役割（？）」と題して、現状と将来の方向性について紹介いただいた（図 3）。天文学が学問の発展を牽引してきたことのみならず、一般市民の関心が極めて高く、天文情報の経済的価値は大きいこと、さらにサイエンスコミュニケーション活動は極めて活発で、さま

図 3　嶺重 慎 氏

ざまなチャネル、さまざまな対象に活動が行われていることを紹介された。一方で、そのノウハウの共有が不十分であることや、日本独自の活動を国際的に発信していくことの必要性が提言された。

4. 人は宇宙から活力をもらえるか？

次に、岡村定矩氏からは、「人は宇宙から活力をもらえるか？」をテーマにお話しいただいた（図 4）。人類の宇宙への憧れと畏怖・自らのルーツを知る・世界観を形成する・知的好奇心を満たす、といったことから人間は宇宙から活力をもらっている。このことをさまざまな実例を元に述べられ、さらに現在 IAU で進められている「発展途上国のための天文学」を例に挙げ、工業と技術・文化と社会・科学と研究において、持続的な社会の発展に天文学が大きく寄与していると報告された。

図 4　岡村 定矩 氏

5. 総合討論

最後に話題提供をしていただいた 3 氏と会場の参加者での議論が活発に行われた。身近な例では観望会やサイエンスカフェの実施が科学、天文への興味を高めるのに寄与している例が報告された。また、筋ジストロフィーの子供達に天文学を教えることで生きる意欲を高めた実践例など、日本における先駆的な取り組みも報告された。天文学を理解するには視点移動が必要不可欠で、さまざまな立場からものを見る良い訓練になること、そして、導かれる結論は同一となることから、対立する団体を一緒に天文学を学ばせ、互いの立場の相違を気づかせ対立の解消に寄与する例などが紹介された。また、科学技術を推進する原動力として、過去には軍事や経済が担ってきた役割を近年では学問がその立場になりつつあり、天文学はその中でも重要な位置を占めているとの考察が述べられた。

一方、巨大科学はどこまで許されるのか、新しい価値観の創造には社会との広い関わりが必要である、といった意見も挙げられ、論議された。

社会と天文学の関わりをより密にするための、天文教育普及研究会や天文学会の取り組みも紹介された。しかしながら、多くの人は日の出も日の入りも見えない環境に生き、空を見上げることの興味を普段持たない。見なければ関心も育たないので、空と天を楽しむ環境作り、天文学が社会と繋がっていることの情報発信が従前に増して重要であろうと考察された。

このように、多岐にわたる活発な意見、報告の発言があり、さらに論議がなされ活況のうちにフォーラムは幕を閉じた。

松本 直記

【編集部注】当日の登壇者の発表資料が、次の URL で見られます：
http://tenkyo.net/forum/2013-1spring.html